

味の素食の文化センター研究成果報告書

<2016 年度研究助成>

動物を要する儀礼及び生業を対象とした民俗学的研究

肉食にまつわる日常食と儀礼食の変容：琉球諸島における事例を中心に

沖縄国際大学非常勤講師 宮平盛晃

2018 年 6 月 1 日

<2016 年度研究助成>

動物を要する儀礼及び生業を対象とした民俗学的研究—肉食にまつわる日常食と儀礼食の変容：琉球諸島における事例を中心に—

宮平盛晃

(沖縄国際大学 非常勤講師)

はじめに

沖縄では、豊作、豊漁、防災、除災、様々な目的の成就を願い、晴れの日のご貴重な食べ物である家畜の肉が神々に供えられ、村人たちによって食されてきた。戦前（1945 年以前）と比べると、家畜の使用から、購買店でのご購入という大きな変化は起こったものの、今もなお、祭事や儀礼には肉料理が供えられることが多い。しかし、近年あるいはそれ以前から、祭司の不在、参加者の減少や高齢化によって、儀礼が簡素化し、肉料理が別の食べ物に変わった事例がみられるようになった。

琉球諸島における肉食文化に関する研究には、特定の年中行事や儀礼の中での把握を目指すものがあつた[1]。しかし、その研究は限られていることに加え、実例として挙げられた事例数は少なく、動物を要する儀礼や年中行事の全容や地域の特徴などは明らかにされてこなかつた。

肉食文化は、世界に広く比較及び展開できるテーマであるが、日本では広く、米を生産の基調とした古代律令国家による肉食否定と、仏教や神道の畜殺や肉食に対する穢れ観などが相まって、その多くは古い時代に姿を消したといわれる。ただ、日本本土との関係が比較的新しい、北海道や南西諸島には残つたといわれる。

ただし、日本における肉食文化の研究は、柳田国男が最終的には研究の対象から切り離したことや、ほとんどの地域で早くに姿を消したことも相まって、民俗学という学問上、議論が展開されることはなかつた。

琉球諸島における悉皆調査によって、その実態と変遷の解明を目指す本研究は、日本本土並びに周辺諸国の肉食文化や肉という食べ物に対する価値観といった問題を比較する際の重要な手がかりとなり、広域的かつ多くの村落を対象とした実証

性の高い分析結果は、民俗学や文化人類学のみならず、それに関連する多方面の研究にも大きく貢献できると考える。

目的・方法

本研究の目標は、琉球諸島における儀礼及び日常における肉食文化の実態と地域的特性の解明、その変遷を明らかにすることである。

分析データは、琉球諸島全域の村落を対象とした悉皆調査によって収集した。具体的には、琉球諸島を中心とした実地調査（フィールドワーク）及び肉食文化に関わる文献資料及び歴史的史料の調査である。また、動物を要する儀礼の観察を実施し、実地調査や文献調査では確認できないデータの収集を行った。

2017 年 4 月～2018 年 3 月にかけて琉球諸島全域の村落を対象に実施してきた悉皆調査の結果、沖縄本島北部 9、中部 11、南部 8、周辺離島 3、宮古諸島 12、八重山諸島 7 の計 50 村落において、日常や儀礼の中にみられる肉食の実態と地域的特性、その変化に関するデータを収集した。その調査結果の一部は、論文（宮平 2018）や口頭発表（1～3）という形で発表してきた。

分析

沖縄本島北部 9、中部 11、南部 8、周辺離島 3、宮古諸島 12、八重山諸島 7 の計 50 村落において、実地調査と文献調査、儀礼観察を実施した。これらの分析から、現在も村落レベル儀礼では、従来通りの動物が使われ、食されている現状が分かつてきた。

動物を要する村落レベルの祭事では、神に供えられた肉料理は、村落の老若男女によって食されることがほとんどであった。本研究では、祭事における村人の肉食行為を、村人が同じ場所で食べるという点に着目し「共食」として扱つた。旧態だけではなく、現況の把握を目指した調査分析は、琉球諸島における肉食文化がどのように変遷し、

現在に至ったのかという点を明らかにする上で肝要であるため、調理方法、食材の入手方法、食する人などの現状と変化、変化した理由について分析を行った。

今回、実地調査を行った村落の8割半ば(50例中43例)では、従来通りの肉の共食が行われていることが確認できた(写真1、2)。

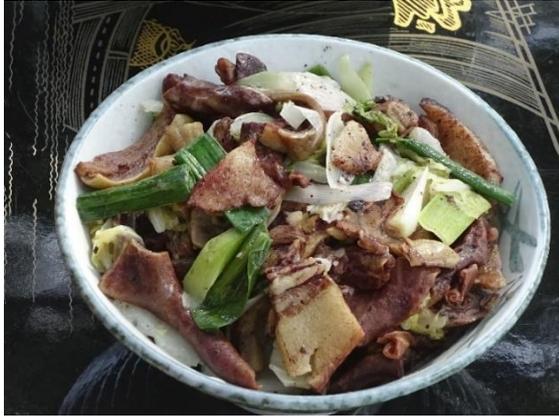


写真1. 豚肉のチーイリチー(血炒め)(沖縄本島周辺離島。2017年撮影)



写真2. 山羊の刺し身(宮古諸島。2018年撮影)

しかし、その内容には大きな変化が起こっていることが分かった。それは共食への参加者の減少である。今から約60年前(1960年代)から共食への参加者が減少していったことが、琉球諸島全域で起こったことが明らかになった。

写真3や4にみるように、共食への参加者が相当数みられるような村落においても、女性や若者たちの姿がみられないことが分かる。年齢・性別の規定がないにも関わらず、年配の男性だけの参加になり、現在に至っている村落が7割(50例中35例)に上っている(写真3)。さらに、参加者が

減少し、数人の女性神役や公民館役員(写真4)だけになった村落も17例存在した。



写真3. 豚肉の共食に集まった年配の男性(沖縄本島北部。2018年撮影)



写真4. 公民館役員による祈願後の豚肉の直会(沖縄本島南部。2017年撮影)

村落レベルの祭事への関心の低下に加え、変化の要因となったのが、かつて肉の共食を要する儀礼への村人の参加数の多さを支えた、ご馳走としての肉に対する意識の変化と考えられる。約60年前までは、琉球諸島において、肉は滅多に食べることができないご馳走であったといわれる。豚や牛一頭を使う儀礼でも、村人全員に割り当てられる肉の量は少量であった。しかし、少量であっても、ご馳走の肉を食べるために、老若男女の村人たちは村落の広場に集まり、肉を食したという。肉の購入が容易となった現代において、肉という食べ物は、時間を割いて人前に集まるほどの魅力あるご馳走ではなくなった。そのため、儀礼における参加者は減少してしまったという証言が多く確認できた。

村落の人々への呼びかけは功を奏さずに、参加者の減少には歯止めがかけられないという現象が琉球諸島の各地で確認できた。今後、年配者だけの参加から、人数が減少し、数人の祭司だけの共

食、さらには儀礼から肉の共食という要素の省略が起こる可能性が高い。

儀礼食の変化の調査のため、沖縄本島を代表する那覇市と糸満市の公設市場の肉屋の関係者に対する聞き取り調査を行った。さらに、沖縄は豚正月・肉正月と表現されるように、旧暦の正月に各戸で肉食が行われた。その現状を分析するため、旧暦の大晦日に両公設市場の実地調査も実施した。公設市場の消費量が、琉球諸島における肉食の実態に直結するわけではないが、儀礼食の現状の一端を知る手がかりになると考えられる。

聞き取り調査によると、かつては1年で最も賑わう日であったというが、最近では旧暦の大晦日に肉の購入に来る地元の人は非常に少ないという。実際に当日、両公設市場に調査に行くと、肉のほか仏壇に供える赤紙や田芋など、正月を象徴する供物は販売されていたものの、市場は閑散としていた(写真5、6)。家庭レベルにおける儀礼食の中からも、肉という食べ物が減退傾向にあるということを示唆する現象と捉えられる。



写真 5. 糸満市公設市場の旧暦大晦日の風景 (2018年撮影)



写真 6. 那覇市公設市場の旧暦大晦日の風景 (2018年撮影)

さらに、琉球諸島における動物を要する日常食及び儀礼食の動態を考察するため、沖縄県と全国

の肉類の平均消費量の比較分析を行った。

表1にみるように、近年の沖縄県における肉類の消費量は全国平均を大きく下回り、ワースト5位にランキングされている。日常食としての肉が多いエリアとは把握できず、今後も消費量が多くなる可能性は低いと考察される。

表 1. 肉類平均消費量 (総務省統計局 2018)

肉類		
1	奈良市	109,849
2	大津市	108,885
3	京都市	108,459
~	~	~
46	秋田市	71,628
47	新潟市	71,446
48	那覇市	71,065
49	盛岡市	70,989
50	水戸市	70,719
51	長野市	68,912
52	前橋市	65,193
0	全国	88,279

-----<金額>

平成26年(2014年)~28年(2016年)平均

次に、祭事において神々に供えられ、人々に食されてきた肉に焦点を当て、それが別の食べ物に変わった事例を分析し、両者の互換性についての考察を試みた。

琉球諸島全域にみられる村落レベルの防災を目的としたシマクサラシ儀礼の事例群の中で、供物及び共食料理が、肉から別の食べ物に変化したという事例の分析を行った。

分析の結果、供物及び共食料理ともに牛肉または豚肉料理から豆腐料理といったように、豆腐に変わったという事例が顕著であった(10例中7例)。沖縄県の豆腐は島豆腐といわれ、他府県に比べ一回り以上大きいこと、温かい状態で販売されていることなどが特徴として挙げられる。

さらに、豆腐を肉料理とともに供える、あるいは共食するという事例が、沖縄本島において5例(大宜味村見里、名護市田井等、旧佐敷町津波古、旧具志頭村与座、糸満市米須)みられ、沖縄本島中部の西原町では、シマクサラシ儀礼をトウフグー トウエー(豆腐取り)と呼ぶ村落が確認できた。

それらの中に、かつては儀礼に集まった人々に豆腐を分け与えた村落が確認できた。豆腐の以前

は肉であったという伝承は未確認であるものの、肉を分けたという村落の儀礼との内容の類似性から、両儀礼は新旧の関係にあると推測される。共食や供物、儀礼名称が豆腐であることから、豆腐から肉ではなく、肉から豆腐に変化したと考えられる。

そして、豆腐と肉が互換性の高い食べ物と考えられていたことの傍証と考えられる動物儀礼が、沖縄本島北部に5例確認することができた。

1つは、本部町瀬底（沖縄本島北部）で毎年10月、防疫を目的として行われるシカサニという儀礼である。儀礼に使う供物や共食として、牛肉と豆腐を毎年交互に用いている。2つ目は、同じく北部の本部町崎本部のウンネー（防疫儀礼）とンズネー（用水路の完成祝い）と呼ばれる儀礼である。一丁の豆腐を各拝所に供え、祈願後、参加者による共食が行われる。両儀礼とも、儀礼に使う豆腐は古くは牛肉であったという伝承が確認できた。

本儀礼の最後に訪れるウシヤキモーという広場では、豆腐に包丁を刺すという行為が行われる。これは豆腐を牛に見立てて、牛の畜殺を表現するものと認識されている（写真6）。沖縄本島北部にはウシヤキ（牛焼き）と呼ばれる牛を要する儀礼が存在する。その儀礼での畜殺場をウシヤキモーと呼ぶことなどを崎本部の儀礼と照合すると、崎本部の豆腐は牛肉から変化したものである可能性が非常に高いと考えられる。

このように、儀礼に使われてきた肉が、別の食べ物に変化した事例があること、その食べ物として豆腐が多いことが分かった。実際に今回、牛肉を要する儀礼の最中に数人の祭司たちが協議を行い、「儀礼に使う肉を今年から豆腐にしましょう」という結論に至り、肉から豆腐へと変化した現場を目の当たりにした村落もあった。



写真6. 牛に見立てた豆腐への儀礼的切込（沖縄本島北部。2017年撮影）

しかし、肉から豆腐への変化が増加していく可能性は低いと考えられる。その根拠として、近年における沖縄県の豆腐の消費量が挙げられる。

総務省統計局が実施した平成26年（2014年）～28年（2016年）の都道府県別の豆腐の消費量をみると、沖縄県はワースト2位となっている[表2]。その落ち込み度は全国平均より著しいことが分かった。沖縄の日常食において豆腐という食文化の減退傾向として把握できる。そして、前項で扱ったように、日常食の中の肉の消費量も沖縄県は全国的にかなり低い。これらの点を鑑みると、今後、儀礼食としての肉は豆腐へと変化する可能性は低く、祭事の中で継承されていく可能性も高くはないと考えられる。

表2. 豆腐平均消費量（総務省統計局 2018）

豆腐		
1	青森市	98.75
2	金沢市	96.79
3	浜松市	96.29
～	～	～
50	熊本市	67.05
51	那覇市	63.02
52	札幌市	58.52
全国平均		79.99

-----<数量：丁>-----

平成26年（2014年）～28年（2016年）平均

考察・課題

以上、琉球諸島における儀礼及び日常における肉食文化の実態と地域的特性の解明、その変遷の解明を目指した調査分析を行ってきた。

分析の結果、儀礼の場では肉食は形式的に継承

されているものの、共食の参加者は村人全員から年配の男性へと変化した村落が多いことが分かった。また、儀礼食における肉が豆腐という食べ物に変化した事例が確認できたが、その数は限られ、肉が別の食べ物に変化する可能性は低いと考えられる。沖縄の祭事の場合では、供物や共食料理として肉が使われることが、依然として広域のかつ多くの村落にみられるものの、変化例の中では豆腐が最も多いことと、代用品とは捉えられないほどの強い互換性を示す事例があることなどが明らかになった。そして、日常食としての肉の動態を近年の消費量から分析した結果、沖縄県は下位グループに属することなど、肉食文化の減退傾向が確認できた。

悉皆調査によって、人々に肉料理として認識されている写真7にみるようなオードブル料理や折り詰め料理を販売店に注文、あるいは儀礼当日に購入してくる事例が確認できた。共食用、供物用として肉料理の準備の煩雑さを無くするため、このような村落がみられるようになっている。



写真7. 共食用の肉から変化した折詰料理（沖縄本島南部。2018年撮影）

琉球諸島における肉食文化は、儀礼や日常の場に形式的には残ると推定されるが、その変化例や消費量の分析結果を鑑みると、減退していく傾向が進行すると考察される。

今後、民俗祭祀の実態と変化の調査に、食生活や生業といった生態的環境の動態の把握を踏まえた分析を加え、琉球諸島の肉食文化の問題を考察し、調査の対象を東アジア、東南アジアへと展開していきたい。

参考文献

- 宮平盛晃（2018）「沖縄本島北部の牛焼き儀礼に関する一考察—供犠性及び稲作儀礼との関連性の検討を中心に—」『沖縄民俗研究』沖縄民俗学会、第35号、pp.1 - 29
- 総務省統計局（2018）「家計調査 品目別都道府県庁所在市及び政令指定都市」
(<http://www.stat.go.jp/data/kakei/5.htm> 1)

注釈

- 1) 宮平盛晃（2017）「牛の聖性とその理由—南島における防災儀礼に要される動物の種類と人々の認識の分析を中心に—」『第二回 沖縄文化協会沖縄文化協会・東京支部研究発表会』東京
- 2) 宮平盛晃（2017）「肉と豆の互換性と変化に関する考察—沖縄の神々に供される供物と共食を事例に—」『日本民俗学会第69回年会』京都
- 3) MoriakiMiyahira（2017）. A Study on Distribution Morphology and Action of Disaster prevention rituals in the Ryukyu Archipelago, Future Perspectives for Island Society: Sustainability and Self-Management, Réseau d'Excellence des Territoires Insulaires 2017 in Okinawa symposium, Okinawa (Japan)